

ヨハネによる福音書12章20～26節

●使徒パウロは「愛の賛歌」(コリント一 13 章)で「愛は忍耐強い。情け深い。…信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」と記しています。

私は 20 代の頃、シニアホームで働いていましたが、その仕事は忍耐が必要な場面が多く、辛く虚しい気持ちになる事も経験しました。そんな時、先輩職員が「愛はその人の中に必ず残るからね」と声をかけて下さいました。未熟な私に、人のための忍耐、愛は決して無駄な行為ではなく、誰かの中に残り続け、それは必ず実りを生み出すのだと教えてくださったのです。

●「人の心に残る愛」それを最もこの世で示されたのはイエス・キリストです。イエス様は十字架に架かれる直前、自分の死を「一粒の麦」にたとえて話されました。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者はそれを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」この例えに込められた意味の一つは「自分に死ぬという事が、他者を生かし、自分も生かすのだ」ということです。

●地に落ちて死ぬ、自分の命を憎むという事をカトリックの渡辺和子さんは「小さな死」という表現で説明されました。「小さな死」とは、自分のわがままを抑えて、他人の喜びとなる生き方をすること、面倒なことを面倒臭がらず、笑顔で行うこと、仕返しや口答えを我慢することなどを意味し、そのような「小さな死」は命を生むのだ」と語り、アッシジの聖フランシスコの「平和の祈り」を紹介しておられます。

●私たちは時に自分ばかり我慢していると感じたり、誰も評価してくれなと嘆いたり、愛の行いを虚しく感じる時があります。そんな私たちに聖書は「あなたの蒔く小さな麦、愛の種は必ずや誰かの中に残り、大きな実りを実らせるのだ」と告げています。そして同時に、そんなあなたにこそ主と共に生きる新しい命、深い平安が与えられるのだと教えているのです。ここに大きな励ましがあります

●ただ私たちはいつもそのように生きられるわけではありません。弱い存在です。だからこそ、今日の「麦の例え」に込められたもう一つの意味を覚えたいのです。

それは、神の子であるイエス様というお方が、そんな私たちのために十字架で死に、命を捧げてその愛の種を私たち全ての人間の心の中に蒔いてくださったのだということです。

このイエスが蒔いて下さった愛の種こそが、私たちにとっての最も大きな希望です。私たち自身には限界があります。けれども、私たちの心にまかれたイエスさまの愛には無限の可能性があるので。その私たちの内に確かに宿っている愛が豊かな実りを実らせる事を信じたい。そう願います。